

# 「体動かずとも」遺稿が小説に

## 筋萎縮の故小林さん

六十一年七月、柏崎市の国立療養所新潟病院で、一人の青年が進行性筋萎縮症で亡くなった。同市本条の小林義人さん。二十六歳だった。小学校一年生の時に入院してから十九年間に及ぶ長い闘病生活。まぐら元には、二期の大学ノートが残されていた。自分の生いたち、歩んだ道を小説の形でつづけた未完の自伝ノートだ。小林さんの母校、県立柏崎養護学校の先生がそのノートを基に小説にし、同人誌「北方文学」二月号に発表した。題名は「心までは妻(な)えず」。同じ病氣を持つ仲間たちを勇気づけたいとの願いが込められていた。

## 母校の先生がまとめる

### 「同病の仲間励ましたい」

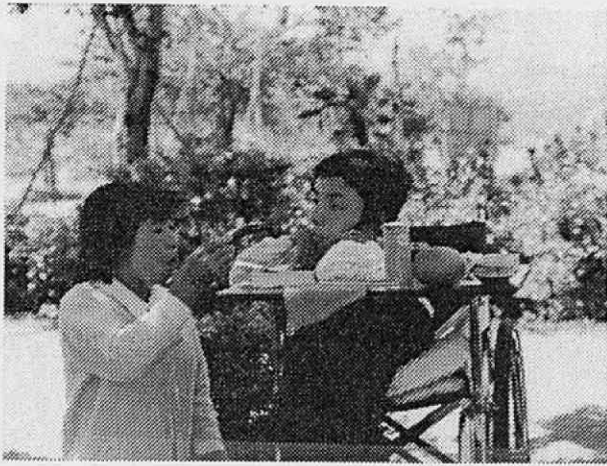
ながら小、中、高校と養護学校に通った。卒業後は、筋ジストロフィー患者らで作る同校OBの文芸サークルに参加していた。「炎のように」は、小林さんの作品三十三編を集めた詩集で、高橋さんはこれを見え時、「体の自由を奪われつつも、神は、冬の月のように研ぎ澄まされ、感動的だった」と話す。高橋さんは、自伝ノートが残されていることを知り、小林さんが「北越雪譜」の研究もしている高橋さんは、「遺志をかなえる手伝いをしたい」と、両親の同意を得て一昨年十一月から自伝ノートに沿って小説を書き始めた。

「初めこそ自筆だが、病氣が進んで筋力が衰えてからは、病棟の職員らに頼んで口述筆記してもらっていた。にもかかわらず、病氣に立ち向かっていく姿勢、悩み、友情など心の内面が、表現力豊かに記されている」と高橋さん。

新潟大教育学部在学中からこれまでに約二十編の小説を書き、「北越雪譜」の研究もしている小林さんの生き方と病氣のことを多くの人に知ってもらいたかった」と高橋さん。

母親の百合子さんは「明るく生きた義人のノートが、こんな形でいかしてもらえて幸せ。生きていれば、きっと喜んでくれたことでしょう」と話し、小林さんの靈前に発行されたばかりの同人誌を供えている。

「北方文学」は、長岡市東坂之上町二丁目、文進堂書店内、北方文学会(〇二五八一三二一三二六二)発行。



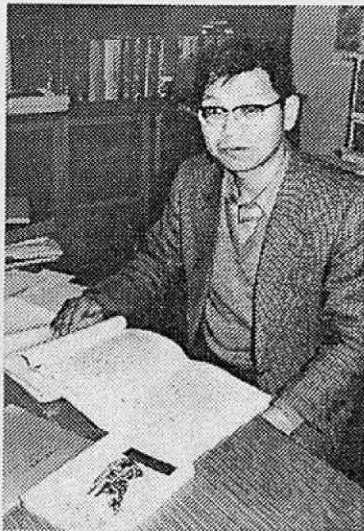
母親の百合子さん(左)と語り合う小林義人さん(五十六年当時)

|| 柏崎市赤坂町の国立療養所新潟病院近くで

この先生は、刈羽・小国町上岩田の高橋美さん(母)。小林さんが亡くなった翌年春に、小千谷西高校から同養護学校に転校した。高橋さんが小林さんを知ったのは、同年初、新潟病院指導室が編集、発行した小林さんの詩集「炎のように」車椅子(いす)のチャレンジャー 小林義人遺稿集」を手にしたのが、きっかけだった。

「体が動かないと何もできないのか、そんなことはない、ハンディは大きいけど、力いっぱいぶつかれば、きつと何かができる、生きている、君は、確かに生きている、熱いたましい車椅子のチャレンジャー」

小林さんは、同病院に入院し



小林義人さんの遺稿をもとに「心までは妻えず」を書き上げた高橋美教諭 || 刈羽・小国町上岩田の自宅で